

## ニュースレター Vol.10

2024年 12月発行

### 公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

#### ご寄付くださいました皆さまへ

平素は、公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金に温かなご寄付をいただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

今年も年の瀬を迎える頃となりました。皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

私どもは、宇温(たかはる)が遺した「人からもらった幸せを その人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」という言葉を礎に 2019 年に基金を設立しました。宇温の「幸せをつなぐ」という思いに、たくさんの方からご賛同いただき、ご寄付くださいましたことで、助成活動を続けることができました。

今回、基金の活動をご報告できますことは、これもひとえに皆さまからの温かなお心の賜として、深く感謝申し上げます。

#### 助成活動と助成先からのメッセージ

皆さまからいただきましたご寄付につきまして、宇温が沖縄での学生時代にかかわりをもっていました一般社団法人 大学コンソーシアム沖縄 子どもの居場所学生ボランティアセンターさん、並びに、特定非営利活動法人 アメラジアンスクール・イン・オキナワさんに助成し、活用いただいています。

子どもの居場所学生ボランティアセンターさんでは、以前から精力的に続けられています沖縄県内の離島への学生ボランティアの派遣において、今年度夏季に離島 5 島 10 ヶ所への子どもの居場所に学生を派遣されることに助成金を活用くださいました。派遣された学生の方々から、沖縄の離島の子どもたちとのかかわりや学習支援を通じて、多くの学びや気づきのある活動の報告を別紙 1 に掲載いたしました。

アメリカンスクール・イン・オキナワさんでは、運営が極めて厳しくご苦労されている中で、教育環境の整備や教育活動の充実の一環として、授業で使用されるデジタル教具や教室での学習環境の改善につながる物品の購入に助成金を活用され、子どもたちの教育に役立ててくださっています。スクールさんからの報告を別紙2に紹介いたします。

## Facebook ページ

琉球宇温基金の近況などを皆さまにお知らせできるよう、Facebook のページを立ち上げております。現在、基金の紹介と、このニュースレターでご紹介した助成などの活動が主な内容となっております。不定期での更新となりますので、時折ご覧いただけましたら幸いです。下記 URL、または、Facebook の「琉球宇温基金」を検索してご覧いただくことができます。

<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

なお、本ニュースレターにつきましても Facebook からご覧いただけます。

## 今後に向けて

2020 年代も早くも半ばに差しかかり、世界や社会を見渡せば混乱や分断が続いている一方で、地球規模での課題の解決や持続的な社会を視野に入れた多くの具体的な取り組みや新たな息吹もみられています。また、来年は未来社会の実験場となる万博が日本で開催されます。

そのような中で、将来を担う子どもたちや若い世代の皆さま、そして助成先の方々が、高い志をもって活動されています。基金としましては、できることを着実に積み上げていくことを通じ、宇温が遺した言葉「人からもらった幸せをその人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」の思いを改めて認識し、これからも社会課題の解決につながる地道な活動を続けてまいりたいと存じます。

今後におきましても公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金への温かなご支援とご協力を賜りますこと、何卒よろしくお願い申し上げます。

以上

## **(別紙 1) 子どもの居場所学生ボランティアセンターさんからいただきましたレポート**

「こどもの居場所学生ボランティアコーディネート事業」は、内閣府が主導することも貧困緊急対策事業の一環で沖縄県から委託を受け、大学コンソーシアム沖縄に加盟している 11 の高等教育機関の現役学生を、県内の子どもの居場所へボランティアとして派遣しています。そのような派遣は、他県よりも深刻と指摘されている沖縄の子どもの貧困問題という地域課題解決を目的に実施しています。学生ボランティアとの関わりを通して、居場所へ通う子どもたちの精神的安定や学習意欲の向上がもたらされ、将来への夢を具体的に描くことができるようになるなどの効果の報告がなされております。

当事業は 9 年目を迎えました。今年度 9 月末時点の上半期には 263 名の学生が登録し、そのうち 206 名が活動しています。琉球宇温基金を活用させていただいている離島派遣事業では、今年度夏季（8 月中旬～9 月中旬実施）に 20 名の学生を 5 島 10 ヶ所の居場所へ派遣することができました。初めて参加する学生もいれば、募集をかけるたびに応募してくれるリピーターもいて、希望した学生はすべて派遣のための調整を行うことができます。これもひとえに琉球宇温基金様をはじめ、ご支援を下さっている企業・団体様・個人様の力添えによります。ここに、改めて深甚なる謝意を表します。現在、石垣島、宮古島、伊良部島、伊平屋島、南大東村の 5 島への派遣を実施していますが、今後は離島地区の子どもたちに対する支援の更なる充実を目指して、派遣先の拡大を目標に開拓を行っていく予定です。令和 7 年 2 月中旬から実施する予定の春季離島派遣時には、新たな派遣先が加えられる様に準備していきたいと思っています。以下、令和 6 年度夏季（R6.8 月中旬～9 月中旬に実施の活動）から、学生の活動報告を抜粋してご紹介します。

### **◆子どもホッ！とステーション・子どもホッ！とステーション未来塾（石垣島）／琉球大学 1 年次 清水菜々子**

島に高校までしかない分、大学生と関わる機会がないことから進路について、本島の子どもたちと比較すると選択の幅が狭くなってしまったと感じた。また、自分の生まれ育った環境についても振り返ることができた。私は石垣島出身であるが両親は移住者で大学にも通っていたため、私も自然と大学に行って学ぶことをイメージしながら小・中・高と学校生活を送っていた。でも、そういった家庭環境でなかったら、今の自分はいないかもしれないと考えた。島にはそのような環境で育つ子どもが多くいる。だからこそ離島派遣で大学生と関わり、進路や島を出て生活することについて話をして視野を広げることが子どもの可能性を広げることになると強く感じた。今回の派遣で、自分が生まれ育った島に少しでも恩返しすることができたこと、何より、島の子どもたちと関わることでとても嬉しかった。

### **◆さんご学習支援教室（伊良部島）／名桜大学 2 年次 江原匠**

初対面でお互いに緊張感がありました。どこまで分かっているのかを探りながら、勉強を教えました。子どもたちと話をする中で、本島(那覇)に行きたいと話している子がいて、内地や本島に憧れを持っている子が多かったです。宮古島では、漫画の新刊が出るのも遅いと言っていました。インターネットの普及により、他の地域との差が縮まっていますが物資の面で

悩みはあることが分かりました。居場所の方に島の事を話していただきました。この居場所では人手が足りていなく、1人で7人を対応する日があるので人手不足は深刻だと印象を受けました。不登校や、家庭に問題を抱えている子など、日ごろ私の定期活動で接する子どもたちではなく、居場所は集う場所として機能していることを知りました。学校も中高一貫で、



不登校がないことは島の良いところだと思います。地域の繋がりが強く、一つになっている印象を受けました。

一日だけ関わる子もいて一期一会だと思いました。帰り際にバイバイしてくれたのが嬉しかったです。派遣される前よりも、より子どもと関わる仕事に就きたいと思うようになりました。慣れたところに終わってしまい、今後も継続できる方法があればいいなと思いました。学習支援は on-line でもできるのではないかと思います。

#### ◆サシバ教室（宮古島）/沖縄国際大学 3 年次 山城杏子

子どもは思っているより大人をみていて、周りの視線や雰囲気を読み取り、子どもたちなりに気を遣っているのが感じられました。居場所の子どもたちは、みんなではないと思うけれど、色々な大人を見て、自分を守ってくれる人を見つけている子もおり、大人に気を遣うことを覚えた子もいると思いました。だから私は、遊ぶ時も、宿題をする時も、本気で子どもたちと向き合って本気で遊びました。分からないことは正直に分からないと言って一緒に調べてみたり、ゲームのルールなど分かるまで子どもたちに何度も聞いて教えてもらったり、手加減をしないで私自身も楽しむことを意識しました。そうすると、子どもたちが自分の好きなことや自分の気持ちを素直に話してくれるようになり、打ち解けることができました。

中学生にしては小柄な女の子が「小食だから給食いつも減らしている」と悩みを話してくれたり、小学生の男の子は「いつもボランティアの人が最後のとき泣いてしまう」と話してくれました。何事にもしっかり向き合うことでそれが子どもにも伝わると思いました。子どもたちが安心して自己開示ができるような関わりや、環境を作ることがとても大切だと思いました。



#### ◆学習支援教室まなびやあ（宮古島）/琉球大学 1 年次 城間日万梨

派遣期間は子どもたちが少なく、食事を1人でとらざるを得ない子がいたため、そばで会話をしながら「孤食」にならないよう気を付けました。中高生と一緒にご飯を食べ、じゃんけんで負けた人が皿洗いをしたりと、中学生に戻ったみたいで楽しかったです。

居場所の方の「暴言を放っておくと、暴力につながる」というお話がとても印象的であったため、特にその点に注意して子ども

たちとの会話を楽しみました。アットホームな雰囲気、子どもたちとの距離が近く、とても居心地がよかったです。また、居場所の方が汚い言葉や暴言を言わないようきちんと気を付けているおかげか、汚い言葉を使う子どもは1人もおらず、暴力をふるったり、暴れたりする子もいませんでした。子どもたちも初めはとても緊張していましたが、自己紹介をしてくれたり、打ち解けてきたら、学校のことや家族のことなどたくさんのことについて話してくれて、とても楽しい2日間でした。



#### ◆エンカレッジデイゴ学習支援教室（宮古島）/名桜大学2年次 信太美都

将来は児童生徒に寄り添える教員になりたいと考えていましたが、今回の活動を経験し不安になりました。「寄り添う」という本当の意味がいくら考えてもわからないからです。話を聞いたところでその子どもたちの家庭環境が変化するわけではありません。自治体によっては一人で生活するためのお金を支援するとしても限界があります。このようなことを考えると、先に述べた「寄り添う」とは何か、の答えがまだ明確に出せません。しかし、理解したつもりになって、学習支援、生活支援の活動を終わりにしてはいけなそうと考えまそう。そのため今は、現場での実践を通して考え続けることが必要であると考えています。

今回の活動を通して、教師とは、尊い職業だなと感じました。様々な家庭環境や事情を抱えながら、周りの子と変わらずに



過ごしている子、発達障がいと診断されている子、色んな子と関わり、その子たちが将来への希望を見つけられるように導く、そんな職業であると実感しています。

子どもの居場所は確実に必要です。ここがあれば私は、大丈夫という場所があるだけで、救われることがあります。この3日間で居場所の子どもたちにできることは無いに等しかったかもしれないけれど、話を聞いてくれる人がいるということを伝えられたらなと思ひ、子どもたちと関わりました。

#### ◆てるしのジュニアクラブ（伊平屋島）/琉球大学2年次 椎名綾

人口が少ない離島であることもあり、子どもたちも含めた、人と人との結びつきの強さを実感した。子どもたちはお互いをよく知っており、家族ぐるみの交流もある。そうした他者との繋がりの中で、子どもたちが育っていていることを実感できた。活動の中では、私自身も子どもたちと一緒に、居場所の方から夕食をご馳走になった。子どもとご飯を一緒に食べる中で、子どもからの話もたくさん聞くことができた。ある子どもはウミンチュを目指していて、そのため的高校に行きたいと話していた。小学校低学年にもかかわらず、将来行きたい高校が決まっているのはすごいなと私は感心し、その子に大学は行くのか聞いてみた。すると、大学進学については悩んでいる様子で、「大学って先生は黒板書くの早い？」と聞いてきた。その答えを聞いて、その子の担任の先生は黒板を書くのが早いのだろうかと思うのと同時に、とても小学生らしくて可愛い疑問だと思った。食事をしながら、大学はどんなところかを伝え、子どもにとって将来像を膨らませられる手助けができたと思う。伊平屋島には高校や

大学がない分、中学校卒業以降の様子が想像しづらい。その分、私を含めた沖縄本島から来た大学生と交流できたことは、子どもたちにとって新鮮な体験だったのではないかと思います。

#### ◆夢クラブ児童館（南大東島）/琉球大学 3 年次 竹中誠瑛

宿題を見る際などに子ども達と会話するなかで、子ども達は自分達のことを詳しく教えてくれた。自分は〇人兄弟で自分は未っ子だということ、太鼓または三線を習っているなど、幾つもの面白い話を聞かせてくれた。（多人数兄妹がとても多かった。）今回の活動を通じて、自分から話しかけることも大切だと感じた。定期活動でいつも遊んでいる子は、いつもその子から誘ってくれたから話す機会が多いのではないかと考えた。これからも話す機会が多い子・少ない子関わらず、自分から声をかけていきたいと思った。

最後に、3 日目の時に子ども達はなぜか自分を部屋に入れないことがあった。嫌われたのかと思ったが、最終日に関わった子ども達全員手作りのお礼の手紙を用意していたことがわかり、感動した。常に口の悪かった子（仲良くなるのは正直困難だった）もお礼の手紙を書いており、完全に自分を拒絶しているわけではないと思った。他にもお礼のプレゼントを何個か作ってくれたので、とても嬉しかった。

#### ◆南大東村立学習支援センター（南大東島）/琉球大学 4 年次 山田祐輔

この島は祭りや行事が活発で、豊年祭に向け、相撲が子どもたちの中でも流行している様子だった。中学生はあまり関係性のない人に、質問することはないかなと勝手に予想していたが、対応時間 2 時間のうちのほとんどを質問対応に追われるほど活発に質問してくれて、学習支援のやりがいを感じる事ができた。

今回は台風の影響で 3 日間予定されていた活動が 2 日間に短縮され、1 日早く本島へ帰ることとなった。1 日目は小学生のみの対応で、2 日目は多くの人と関わることができた。もう少し長い期間宿泊して、子どもたちの顔と名前を一致させることができるようになりたかったが、今回はそこまでは叶わなかった。自分の卒業論文の対象となる地域が南大東島なので、今後も南大東島にはお世話になるだろう。教えるよりも教わることが多くなるが、大学生としての良いイメージを島の人たち、子どもたちに持ってもらうことができるように頑張りたいと思う。



## (別紙2) アメラジアンスクール・イン・オキナワさんからいただきましたレポート

日頃より当スクールを支えていただき心から感謝いたします。

貴基金による支援は、本校の教育環境の整備や教育活動の充実に欠かせない重要な助成金となっています。

今年度も基金による助成を頂き、授業改善のためのプロジェクター及びその周辺機器としてポータブルスピーカー、HDMIコード、変換プラグ等の備品を購入しました。また、学習環境改善のための、扇風機とサーキュレーターも購入しました。誠にありがとうございました。

さて、本校には、英語と日本語の言語能力の異なる子どもたちが混在しています。その子どもたちにとって、プロジェクターで映し出された画像や動画あるいは文字や資料は、言語学習の大きな助けになっています。また、幼稚園児や低学年のリズムを交えた言語学習にもプロジェクターは活用され、子どもたちの学習意欲の向上にとても役立っています。

このように本校では、デジタル教材教具を活用した授業が重要かつ主流になっています。しかし、本校のデジタル環境は課題があり、授業に支障をきたすことがありました。特にプロジェクターは、ほとんどの教師が使用するため、その絶対数が足りず大変困っていました。そこで改善策として、プロジェクターとその周辺機器を購入しました。今では、全ての授業でプロジェクターが使用できる状況にあり、生徒・教師とも満足いく教育活動ができています。

次に学習環境ですが、本校の各教室にはクーラーが設置されていますが、それだけでは教室全体が十分に冷やされず、学習環境としては課題がありました。また、教室不足のためクーラーの設置されていない玄関ホールで授業を実施することもあり、夏場は学習環境として大変厳しい状態でした。そこで暑さ対策として、扇風機とサーキュレーターを購入しました。

現在は、各教室や玄関ホールに扇風機を設置したこと、貸出用のサーキュレーターが提供されることで、子どもたちは涼しい風を感じながら集中して学習に取り組んでいます。

最後に、長年の貴財団による本校への支援は、学習環境や学習教材教具の改善・充実を確実に推進する貴重な財源となっています。改めて本校教育活動へのご理解とご支援に心より感謝申し上げます。

アメラジアンスクール・イン・オキナワ

校長 比嘉 政宏





世界遺産 中城城跡 (なかぐすくじょうあと)

公益財団法人 **みらいファンド沖縄・琉球宇温基金**

〒901-2102 沖縄県浦添市前田 1-6-24 トミハウス 1階

TEL 098-963-7969

<https://miraifund.org/kikin/takaharu/>



<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

